信長の黒人「サムライ」弥助

ロックリー・トーマス

日本人に大人気の戦国の英雄織田信長であるが，実のところ最近まで海外ではあまり知られていなかった。ところが近年，その状況に変化が生じている。それは信長本人のためではなく，彼の人生の最後の年を共に駆け抜けた彼の従者の存在が世界史上，興味深い存在として注目され始めたことによる。彼の従者の名は日本の史料によると「弥助（やすけ）」，「サムライ」としては極めて特異な存在であった。なぜなら彼はアフリカ人だったからである。

弥助とは？

弥助がどこで生まれたかは分からない。肌の色が漆黒で背の高い人であったという記述からは，北東アフリカのディンカ族が想起される。とはいえ，イエズス会の史料からはポルトガル人の要塞や奴隷市場があったモザンビーク島経由でインドに渡った可能性が高いと考えられる。モザンビーク島ではインド洋沿岸部の東アフリカ諸地域から連れてこられた奴隷が取引される一方で，現在の南スーダン周辺やエチオピア，さらには内陸部からも多くの奴隷が集められて取引された。

弥助を雇い入れたアレッサンドロ・ヴァリニャーノは，イエズス会のアジア布教の実態を観察し，各地域で適切な改革をおこなうことを目的に，イエズス会総長から派遣された人物であった。ポルトガル領インド，マラッカ，マカオを経て，ヴァリニャーノは弥助を伴って，1579年，初めて日本の地を踏んだ。

信長との対面から従者へ

1581年，ヴァリニャーノは信長との謁見のため，弥助を連れて上洛した。珍しい「南蛮人」の宣教師よりも畿内の人々の関心を引いたのは，漆黒の青年弥助の方であった。彼は背が高いだけでなく，屈強な肉体の持ち主であった。フロイスの1581年4月14日付書簡によれば，港町堺では，弥助を一目見ようと欄干に上る見物人の重みで建物が損壊したという。さらに京都では，多くの人が弥助を見ようと詰め掛け，押し合いになって圧死者が出る寸前であった。

イエズス会の教会，京都の南蛮寺のすぐそばに，信長が定宿にしていた法華宗の本能寺があった。信長は弥助の噂を聞きつけて，自分の面前に連れてくるように命じた。弥助を見た信長は，まずその肌の色が信じられず，墨で黒く塗っているのではないかと疑って，家臣にその身体を洗わせた。その後，その肌の色が天然のものであると悟り，満足して息子たちを呼びつけると，稀有な訪問者を歓待するために盛大な宴を開いた。宴の終わりに信長は弥助に褒美を与えることにし，甥である津田信澄を通じて，重さ30kgに及ぶほどの大量の銅貨を贈った。信長の祐筆で，その伝記を記した太田牛一は『信長記』(『信長公記』，尊経閣本）で「黒坊の年頃は26，7歳，

図1　「相撲遊楽図屏風」（作者不明，1620～1630年頃。堺市博物館蔵）

図2　火薬入れ（作者不明，ポルトガル，リスボン，国立古美術館蔵）／Museu Nacional de Arte Antiga. Japão, periodo Momoyama / Namban. Fotógrafo : Luis Pavão. Direção-Geral do Património Cultural / Arquivo de Documentação Fotográfica (DGPC/ADF)

十人力で，全身が真っ黒で，容姿に優れていた」と叙述する。

『信長記』によると，「弥助」と名付けたのは信長自身で，彼に居宅や家財道具一式，さらには刀や扶持（給与）を与えて，自らの家臣に取り立てたという。イエズス会士の記録にその後の弥助についての記録は多くはないが，信長は弥助を大いに気に入って，しばしばそばに召していたという。この時代，武士とそれ以外の身分の垣根は曖昧であり，本当に弥助が「サムライ」となったのかについては議論があるものの，少なくともその身一代においては，彼は間違いなく信長の家臣に取り立てられたと考えられている。

堺市博物館には江戸時代に入ってから製作されたと考えられる「相撲遊楽図屏風」（図1）と呼ばれる作品がある。屏風では明らかにアフリカ人と思われる風貌の人物が日本人と相撲をとっており，周囲にはそれを見物する人々，自分もまた相撲をとろうと準備する人々，さらには信長と思われ

図3　硯箱（作者不明，ポルトガル，カラムロ博物館蔵）／Fundação Abel e João de Lacerda, Museu do Caramulo／Alamy

るような風貌の人物までもが描かれている。弥助と信長が生きた時代からは半世紀ほど経過して製作されたものであると考えられているが，それでも人々の記憶に残っていた彼らの姿が描き出されているのではないかと考えると，畿内の人々にとって，それだけ彼らの存在感が大きいものであったと感じることができる。そのほかにも，漆器や織部焼などにも明らかにアフリカ人をモチーフにしていると思われるものもあり（図2，3），当時の日本人の中に存在した，大柄で屈強，肌の色の濃い人々に対する「好印象」がこれらの作品からも理解されるのである。

その後の弥助

弥助に関しては，近年まで『信長記』とイエズス会史料しか，その実在を証明する文献記録はないと思われていた。しかしながら最近では徳川家康の家臣であった松平家忠の日記に，弥助についての知られざる記録が残っていることが分かっている。1582年4月から5月にかけて，信長の軍勢は武田勝頼軍との戦闘のため，甲州に遠征していた。武田家は富士山の後

背地にある山岳地帯を根城にした強固な守りで知られていたが，その頃までには勢力も衰え，電光石火のごとき織田軍の攻撃にあっけなく屈した。織田軍を率いていたのは信長の長男であった信忠で，その後信長は，息子によって制圧された土地の検地を自らおこなったことで知られている。

勝利を収めて安土城へと凱旋途中の一行は，徳川家康の領内を通過する際，家康から手厚い饗応を受けた。連日祝宴が催され，特別な宿所や街道が整備され，示威行為としての隊列が組まれた。信長に対する敬意と忠義を示すため，それらの費用はすべて家康が負担した。隊列の行軍を目にした家康の家臣であった松平家忠は，自身の日記に，そこで見た弥助のことを記した。それによると，信長の家来の「黒坊」の名は弥助で，非常に背が高く，「墨のように真っ黒な肌色」であり，さらに弥助が信長から俸禄を賜る家臣であったという。運命の日，1582年6月21日，すなわち「本能寺の変」はそれから間もなくのことであった。

信長は，弥助を含めた30人ほどの小姓衆とともに，また別の大きな戦の前線へと行軍していた。今度の相手は現在の広島から山口一帯の中国地方を支配していた毛利一族である。屈強な馬は1日に30～40㎞を走ることができたが，必然的にその日は京都までの行軍となり，一行は本能寺に宿泊することになった。前年，弥助が初めて信長に出会った場所である。翌朝未明，一行は煙の臭いと銃声で目を覚ました。明智光秀が突如信長に謀反を起こし，約1万3000もの軍勢で攻め込んできたのである。信長の近侍の兵たちも勇敢に戦ったが，寺が火に包まれるに及んで信長はやむなく自害を選んだ。結局，信長と確認できる死骸は見つからなかった。

弥助は逃げ出さず，織田家の新たな主君である信長の嫡男信忠のもとへと馳せ参じた。信忠はすぐそばの二条御所に立てこもり，守りを固めているところであった。弥助と信忠の残兵は勇猛果敢に戦ったが，奮闘むなしく，隣接する近衛邸の屋根の上から容赦なく一斉射撃を浴びせられた。弥助は明智の家臣らに捕らえられたが，光秀はその姿を目にして「何も知らぬ獣であるから」との理由で解放した。弥助は元の主人であった京都の南蛮寺に住むイエズス会士たちのところへ送られた。弥助が放免されたことについて，イエズス会士たちは大いに喜んだという。これが弥助についての最

後の記録である。

現代の弥助

日本の文化の中に微かに残っていた勇猛で屈強なアフリカ人についての記憶は，20世紀になってイエズス会史料が日本語に翻訳され始めたことにより「再発見」された。弥助の生涯は新たに注目されることになったのである。1968年に少年少女向けの歴史小説『くろ助』（来栖良夫作）が出版されたことを契機に，徐々にではあるが，弥助の話は知られるようになっていった。

21世紀に入ると，アメリカなどで始まったヒーローの多様性を求めるムーブメントの中で，弥助はヒーロー的存在として生まれ変わった。フィクションの入り混じった伝記，小説，劇，美術作品，漫画，映画，ネットフリックスのアニメシリーズなどを舞台に主役として描かれるようになった。アフリカ生まれの一風変わった「サムライ」の持つ意味は，受け取り手によって異なるであろう。しかし，彼の生涯にこれほどまでに人々が魅了されるのは，その生き様から刺激を受け，おそらく「奴隷」の境遇から異国で高い地位を得て，主人の最期まで共に戦ったという波乱万丈の人生に希望を感じるからではないだろうか。言うなれば，弥助の姿に世界中の人々が生きる力をもらっているようにも思われる。

「アフリカ人のサムライ」弥助の驚くべき物語は，史実を越えてフィクションの世界でより一層輝いている。弥助の生涯に関する史料は今後も見つかる可能性があり，多様な文化の中で彼の姿はトランスレーションされ続けるだろう。弥助の話はまだまだ始まったばかりなのだ。彼の物語は書き換えられるかもしれない。

■**参考文献**

金子拓『織田信長という歴史『信長記』の彼方へ』勉誠出版，2009
藤田みどり『アフリカ「発見」日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店，2005
ロックリー・トーマス（不二淑子訳）『信長と弥助：本能寺を生き延びた黒人侍』太田出版，2017